

大学入学者選抜の改革が揺らぐ中で 高校はどのように対応するか

2019年11月1日、大学入試英語成績提供システムの導入が延期され、2025年度入試に向けて再検討されることになった。さらに、12月17日には大学入学共通テスト記述式問題の導入も見送られることとなった。このように大学入学者選抜改革が揺らぐ状況で、高校ではどのように準備を進めていくのか。4つの高校の先生方と、佐賀大学の西郡大アドミッションセンター長にご参加いただき、(1) 思考力・判断力・表現力の育成・評価、(2) 大学入学者選抜における主体性等の評価と高校におけるポートフォリオの活用、(3) 英語4技能の育成・評価の3点を中心に、ご意見をうかがった。

出席者

- ・茨城県立藤代高等学校 吉田真弘先生
- ・静岡県立焼津中央高等学校 露木 隆先生
- ・三重県立上野高等学校 大内智史先生
- ・広島県立呉三津田高等学校 岡寄友一先生
- ・佐賀大学 西郡 大教授
- ・司会：河合塾ガイドライン編集部

※先生のご勤務先の所在地北から順／本文中、敬称略
※先生方の分掌、教科等は囲み参照

高大接続改革の方向性は 前向きに捉えている

——まずは先生方の自己紹介を兼ねて、それぞれの高校の特色をご紹介ください。

吉田 茨城県立藤代高校は、東京まで電車で約30分の距離にある高校で、保護者の多くが東京都内に通勤しています。その影響もあって、多くの生徒が東京の私立大学を志望していますが、近年は私立大学の定員厳格化に伴って、合格実績が伸び悩んでいます。地方にある国公立大学に選択肢を広げたいと考えているのですが、なかなか難しいのが実状です。

露木 静岡県立焼津中央高校は、いわゆる地域の二番手校です。静岡市まで電車で20分のため、静岡市内の高校に通学している生徒も少なくありません。現在、静岡県のコアスクール事業に指定されたことを契機と

して、コアスクール委員会が発足。地元の生徒の流出を防ぎ、地元に信頼される高校になるために、多様な取り組みを進めています。

岡寄 広島県立呉三津田高校は、113年の歴史を有する伝統校です。2013年度から、国立教育政策研究所の教育課程研究指定校事業の指定校になっています。これまでに「論理的思考」では、「定期考査での思考力を問う問題の在り方」「総合的な学習の時間における探究活動の在り方」「総合的な探究の時間を、社会とどうつなげていくのか」などをテーマに取り組みました。2019年度からはカリキュラムマネジメントの研究を進めています。その成果として、授業の在り方は確実に変化しているという手応えを感じています。

大内 三重県立上野高校は地域の伝統校で、2019年に創立120周年を迎えました。地域に根ざした高校で多

くの生徒が三重大学を志望しています。もっと幅広い選択をしてほしいと思い、昼休みに全国のさまざまな大学を紹介する企画などを実施してきました。多様な学力の生徒が混在しており、旧帝国大学や医学部をめざす生徒の学力を伸ばす指導と、生徒の基礎力の底上げの両方が求められます。どの生徒にも求められる教育として、小論文を含めた探究活動の充実に力を入れています。

西郡 佐賀大学は、福岡まで電車で約30分と近いこともあって、学生数約7,000人のうち、約4割が福岡県の高校の出身者です。私の専門は教育学、教育心理学で、大学入学者選抜を研究テーマにしています。現在、アドミッションセンター長と学長企画室長を兼務しており、大学の新しいビジョンの策定にも携わっています。

——高大接続改革の全体的な方向性については、どのようにお考えでしょうか。

岡崙 教員にとっては、それほど改革への不安はなかったと思いますが、やはり生徒や保護者は不安が大きかったようです。そこで、現2年生が入学するときに、新しい入試制度に学校としてどう対応するのか、資料を配付して、不安感を払拭するように努めました。

露木 改革の方向性自体は前向きに捉えています。思考力・判断力・表現力、主体性は、いずれも今後の社会を生きる上で重要な力です。大学入試が変わることで、教員はもちろん、生徒、保護者にもそうした力を高めようという意識が生まれています。

吉田 同感です。AIの進化などによって、知識量だけでは通用しなくなる中で、新しい学力を育成する高校教育へとシフトしていくためには、大学入試が変わる必要があったと思います。

大内 ただ、過去の大学入試センター試験（以下、センター試験）や個別選抜の問題を解いてみると、良く練られた問題、思考力・判断力・表現力が必要とされる問題がたくさんあります。これまでの入試問題を否定するのではなく、良い部分は残しつつ、新たな大学入学共通テスト（以下、共通テスト）がスタートすることを期待しています。

共通テストへの記述式問題 導入見送りに安堵の声も

——12月17日に、2021年度共通テストにおける記述式問題の導入見送りが決定されました。この点についてどのようにお考えですか。

吉田 私は国語の教員ですが、共通テスト試行調査（以下、試行調査）の記述式問題を見て、やはり50万人の受験生に向けた記述式問題は、制約が多すぎて作成するのは難しいと危惧していました。この形式で出題されることになった場合、私が指導するとしたら、フレームを作って、条件に当てはまるように字数を計算して書きなさいと教えることになると思います。こうした指導は、当初意図されていた思考力・判断力・表現力の育成にはつながりません。導入が見送りとなって、ほっとしている部分もあります。

大内 私も国語の教員ですが、試行調査の記述式問題の採点基準では、論理的思考力や表現力は問えないと思います。もちろん、思考力・判断力・表現力の重要性自体は痛感していますし、普段の授業でも向上させるように心がけています。

岡崙 そもそも、なぜ共通テストで記述式問題を出題する必要があるのか、疑問でした。必要な大学は個別試験で出題すればよいと考えています。一方、生徒にとっての記述式問題のメリットは、思考の結果だけではなく、過程を評価してもらえる可能性があることですが、国語、数学の先生に聞くと、試行調査の記述式問題は答えは1つに収斂する問題ということで、それでは意義が薄かったと思います。

露木 本校では、あまり混乱がありませんでした。記述式問題に対応できる思考力・判断力・表現力は、個別選抜でも必要ですし、社会に出ても求められる力です。今回の導入見送りに関わりなく、授業でしっかり高め、定期考査で問うというスタンスに変わりはありません。

西郡 今回わかったことは、共通テ

ストを変えることが、いかに難しいかということです。例えば、大学の入学時期を9月にずらすとか、試験問題を非公表にするとか、そういうことが社会的に受け入れられない限り、共通テストを大きく改革するのは容易ではないということです。

それから、大学の立場として気がかりなのは、共通テストの問題の難易度です。想定平均点は、センター試験は6割でしたが、共通テストは5割とのことです。そうすると、少子化で競争倍率が低下していく中で、共通テストで一定の点数を取れない生徒が多くなり、共通テストでの基礎学力の識別が難しくなる恐れがあります。となると、個別選抜の在り方を見直す必要があるかもしれません。

私立大でも記述式問題の 出題が増える中で 高校の授業や定期考査を どのように変えていくか

——私立大学の個別選抜などでも記述式問題を新たに出题したり、出題を増やしたりする動きがありますが、どのようにお考えですか。

吉田 国公立大学の2次試験で出題されるような記述式問題が増えるのなら、とても良い傾向だと思います。けれども、試行調査で出題されたような記述式問題が増えるとなると対応は困難です。高校教員が現行の教科書に基づいて、同様の形式の問題を作成するのは難しく、市販の問題集頼みになってしまうという不安があります。

大内 今後、どのような記述式問題が増えていくのか、まだ見えていません。数年たって過去問が出揃わないと、どのような問題を演習させれ

ばいいのかわからないですね。ただし、大学入試にかかわらず、思考力・判断力・表現力は社会で求められる力ですから、授業で十分に意識させる問いかけを心がけています。例えば、私が担当する現代文の授業では、「注釈」を考えるヒントとして使うように指導しています。なぜわざわざこの「注釈」がついているのかを考えると、問題作成者の意図が見えてきます。そこまで踏み込むと、解答の道筋がわかるのです。また、最近の生徒は単語で会話を成立させがちです。極端な場合、職員室に来て、「先生、これ」と言う生徒もいます(笑)。そんなとき、文章にして話すように指導します。普段から意識させることの積み上げが、記述式問題を解いたり、小論文で自分の意見を記述したりする力につながると考えています。

露木 焼津中央高校では、古文の定期考査で、本居宣長の古文の原文と、宣長に関して現代文で書かれた記事の両方を示して、そこから読み取れることを記述する問題を出題したことがあります。また最近では、国語でグラフの読み取りの授業を行い、定期考査でも出題しています。試行調査などを受けて、授業や定期考査も変わっています。

岡崎 これまでも、国公立大学の2次試験などでは、思考力を問う問題は出題されてきました。新たな傾向としては、教科の文脈を超えた問題や、現実生活と結びつけた問題、総合問題などは増えるかもしれません。その際、例えば数学の問題として、数学以外の知識などが必要な問題が出題されたときに、現行の教育課程で対応できるのかといった不安はあ

りますが、学校全体で思考力を育成していく方向は変わらないと思います。

西郡 大学にとっては、個別選抜で、高校の教科の枠を超えた文理融合型の問題を出すとすると、出題ミスにつながるリスクを抱えます。例えば、数学の入試問題に、理科を関連させると、数学の教員だけでなく、理科の教員も交えてチェックする体制を作る必要があります。現実問題として、大学教員数が減少している中で、質を担保しながら継続的に出題できる大学は限られるでしょう。

ただし、個別選抜に限らず、さまざまな資料に基づいて考えさせる問題は増えるかもしれません。PISA2018で、日本の生徒の読解力低下が浮き彫りになり、特に資料を読み取って考える力の不足が課題になっているからです^(注1)。この点を改善しようという動きが、大学入試にも反映される可能性があります。

「総合的な探究の時間」を中心に生徒の学びをつなげる

——教科横断型の授業やテストの作成に、高校ではどのように取り組んでいますか。

岡崎 教科横断型の授業は、実際には結構難しいです。例えば、呉三津田高校では、数学と世界史の教員で、「16世紀になぜ数学が再び発展していくのか」をテーマにした授業を実施しました。しかし、異なる教科をテーマや内容でつなげるのは困難で、継続的・体系的な取り組みにしばらくは難しいです。今後は、資質・能力、教科の見方・考え方などの観点から、教科をつなげることが重要に



茨城県立
藤代高校
進路指導主事
国語

吉田真弘先生

茨城県立藤代高等学校 概要

- ◇所在地：茨城県取手市毛有640
- ◇設立年：1973年
- ◇特色：「グローバルな視野と国際性の育成」を教育目標の柱の一つとし、30年以上の歴史をもつ海外短期留学、JICA研修員を招いたインターナショナル・デイなど国際理解教育に力を入れている。55分授業や7時間目延長授業、スマートフォン等による学習支援サービスなどを実施し、生徒の進路実現を支援している。
- ◇進路：2019年3月卒業生 230名
合格者の内訳(現役生、延数)：国公立大学(大学校を含む)19名、私立大学308名、海外大学1名、短期大学4名、専門学校31名、公務員2名

なると思います。例えば、英語には「one」と「the other」という表現があります。なぜ定冠詞「the」になるかという、2つのうち1つを取ると、必然的に残りが決まるからですが、これは数学の確率の考え方に通じます。内容で無理やり複数の教科を結びつけるのではなく、育成したい資質・能力や、見方・考え方などからつなげることが大切だと思います。各教科の授業において、教科固有の見方・考え方、その教科の本質を身につける深い学びを実現し、横断的な軸を通すのは「総合的な探究の時間」でしょう。本校では、「総合的な探究の時間」で探究活動に力を入れています。思考力・判断力・表現力などを高める上で、探究活動の役割は、今後ますます大きくなっていくと考えています。

露木 私もそう思います。焼津中央高校では、2019年度から、「総合的な探究の時間」で、「SDGs探究活動」

(注1) OECDが79の国や地域の15歳を対象に実施したPISA(生徒の学習到達度調査)において、日本の「読解力」は15位と、前回(2015年)の8位、前々回(2012年)の4位から順位を落としている。



静岡県立
焼津中央高校
進路指導主事
理科

露木 隆先生

静岡県立焼津中央高等学校 概要

◇所在地：静岡県焼津市小土157-1

◇設立年：1963年

◇特色：「学力向上と進路希望の実現」を使命とし、「バランス感覚と柔軟性、協働の精神溢れる人材育成」をめざし、各種の学力向上策と、部活動や学校行事にも力を入れている。静岡県の「コアスクール事業」(2018年度～)指定を核とした大学入学共通テストの調査研究、グローバル教育や英語4技能の育成を意識したハワイへの研修旅行など、教育改革を進めている。「総合的な探究の時間」の取り組みについては「Guideline2019年7・8月号」参照。

◇進路：2019年3月卒業生 282名
合格者の内訳(過年度卒生を含む・延数)：国立大学88名、私立大学517名、短期大学8名、専門学校40名、公務員1名

に取り組んでいます。SDGsを活動テーマに設定したのは、避けて通れない幅広い課題が示されているからです。国際的な課題でもありますから、グローバルな視点も養われますし、現代社会が抱える課題を踏まえて、地元の課題を見つけることで、地元に興味を持つきっかけにもなります。1年生2人と2年生2人の異なる学年でグループを編成し、興味を持ったテーマを探究します。

私たちは、この活動が進路について視野を広げたり考えを深めたりするきっかけになることを期待しています。例えば、冬休みにさまざまな大学のSDGs関連の研究を紹介した動画を見て、レポートを作成します。1月には官庁職員にSDGsに取り組む意義について講演してもらいます。3月は東京農業大学の教員と学生、5月には17分野の大学教員を招いて、SDGsの最先端研究を紹介します。6月に、グループごとにポス

ターセッションを行います。このように自分たちが探究してきたことが、大学の研究とどうつながっているのか、知る機会を豊富に設けているわけです。それによって、もっと大学の学びを知りたいと、オープンキャンパスへの参加意欲も高まっています。

大内 探究活動には上野高校も力を入れています。本校では、「総合的な探究の時間」のまとめとしてポスターセッションを行うのですが、その内容を情報の授業でパワーポイントを使って表現したり、国語の授業でレポートの書き方を指導したりなど、探究活動を軸にして、教科横断型の学びにつなげることはできるのではないかと考えています。ただし、複数教科の先生と一緒に授業をするだけでは意味がありません。より深い学びを実現するために、どのような方法が効果的なのか、きちんと精査することが大切です。

思考力・判断力・表現力を育む授業とは

——思考力・判断力・表現力等を高めるために、教科の授業ではどのような工夫をしていますか。

吉田 私は、国語の授業で、他校の例である「R80」を参考にして「R120」という手法を取り入れています。Rにはリフレクションとリストラクチャーの意味が込められています。具体的には、授業の中でグループワークやペアワークを行い、その成果を文章にまとめます。この際、「120字で記述」「2文にする」「文と文の間を接続詞でつなぐ」の3つの条件を課しています。80字ではなく120字にしたのは、試行調査の記述式問題が30・50・120字になっていたこ

とを意識したものです。この学習で、短い文章にまとめる力を養うとともに、適切な接続詞を考える中で、論理的な思考過程が発生することを期待しています。書き終えたら、キーワードが含まれているかという観点から、グループで検討させて最も優れた文章を発表させ、最後に私が模範例を示しています。記述式問題には苦手意識を持つ生徒が多く、まずは書くことに慣れさせる必要があります。いきなり小論文の練習をしても、主語、述語の関係がおかしな文章になってしまいます。短文を書く練習を積み重ねることで、論理構成などが自然に身につくと考え、单元ごとに実施しています。

岡嵯 先ほど申し上げた通り、呉三津田高校では、全教科の全ての定期考査で思考力を問う問題を出題しています。2012年度から開始し、今では学校文化として定着しています。定期考査の後には、教科主任が集まって「思考力問題研究会」を行います。各教科で最もよい問題を1題ずつ選び、「身につけさせたい思考力」「キークエストION」「問題」「解答」「採点基準」「考察(なぜこの問題が良いのか)」を示し合い、それらを教科を超えて共有することで問題の質向上を図っています。

問題の一例を紹介すると、私は2019年度の定期考査の英語で、校内の車椅子用スロープの写真を見て意見を80語で書く問題を出題しました。スロープを上って降りようとする、向こう側には階段しかありません。できれば、この矛盾を批判的に指摘してほしいのですが、そこに気づけない生徒が少なくありませんでした。ただ英文を書くだけでなく、こういう点も気づける生徒を育てたいと考えています。

——西郡 記述式問題では、書かせて終わりではなく、次の学習につながるフィードバックが重要になります。どのようにフィードバックを行っているのですか。

岡寄 採点基準を生徒に公表し、質的にどのような解答を求めているのかを伝えています。また、先述のスロープの問題のように、狙っていたような解答があまりなかった場合は、次の定期考査で類題を出すこともあります。

大内 上野高校ではルーブリックの導入を検討中です。いくつかの観点から、自分の思考がどこまで深まっているのか、生徒自身に判断させることで、思考力の向上に意識的に取り組めるようになることを期待しています。

露木 私は、担当の物理の授業で、最後の5分間、「まとめシート」に、授業を受けて理解したこと、わからなかったことなどを書いてもらいます。シートは、「OK」「VERY GOOD」などのハンコや、コメントをつけて返却します。ハンコは生徒の励みになり、やりがいを持ってくれているようで、6月にほとんど書けなかった生徒が、9月にはかなり記述量が増えました。このシートには、生徒がどこでつまづいているか、把握できるメリットもあります。

西郡 書くことは思考につながります。数カ月でそれだけ生徒の変容が表れると、教員のやる気も高まりますね。

ポートフォリオを 日々の学習活動に組み込む

——焼津中央高校の「まとめシート」

は、物理の授業のポートフォリオになっているようですね。他の高校では、ポートフォリオをどのように活用していますか。

大内 2つの取り組みがあります。1つは、2018年度から、本校の行事を入れたオリジナルの学生手帳「スケルテ」です。十分に活用してもらうためには、学生手帳に親しみを感じることが大切と考え、生徒から愛称を募集しました。生徒たちは、「スケルテ」に、家庭学習の状況、模試の結果、特別活動の内容などを記録しているので、それがキャリア・パスポート^(注2)につながるようなものになればと考えています。毎日コメントを返すのが理想ですが、担任は多忙でそれは難しいので、1～2週に1回コメントするようにしています。もう1つは、「総合的な探究の時間」のワークシートです。ワークシートには、その日に学ぶ内容とともに、「企画力」や「協創力」^(注3)など、当日の活動を通して身につけてほしい力も明示します。授業後には、「どのような力が、どの活動によって身についたか」などを生徒が書き、ファイリングしていきます。

岡寄 呉三津田高校でも、「総合的な探究の時間」で、毎回ワークシートに「振り返り」を記入し、クリアファイルに蓄積していきます。高3の12月に、蓄積した資料をもとに、どのような資質・能力が身についたかを振り返り、新入生に向けて「総合的な探究の時間」の意義を伝えるメッセージを書く「学びのストーリー」作りに取り組みます。2020年度からは、時期を高3の1学期に早め進路選択にも役立てる予定です。eポートフォリオも活用していますが、



三重県立
上野高校
主幹教諭
国語

大内智史先生

三重県立上野高等学校 概要

- ◇所在地：三重県伊賀市上野丸之内107
- ◇設立年：1899年
- ◇特色：伊賀上野城、伊賀流忍者博物館や俳聖殿がある上野公園と隣接。アンティークな洋風建築の明治校舎および正門は県有形文化財に指定されている。65分5限授業や習熟度授業で確かな学力を育成するほか、協力して問題を解いたり発表したりするなど生徒が主体的に参加する形態の授業も多い。小論文指導の取り組みについては『Guideline2019年11月号』参照。
- ◇進路：2019年3月卒業生 317名
合格者の内訳(現役生、延数)：国公立大学70名、私立大学653名、短期大学10名、専門学校・各種学校13名、公務員1名

課題は生徒がなかなか入力してくれないことです。「学びのストーリー」作成に、eポートフォリオを使うようにすることで、活用を促進したいと考えています。

吉田 藤代高校でも、eポートフォリオを導入していますが、「良かった」「ためになった」程度の記述にとどまる生徒もいます。担任によっては「200字以上書くこと」と、条件を指定して指導する場合もありますが、なかなか難しいですね。

露木 焼津中央高校では毎朝、自宅で前日、どの科目を何時間勉強したか、「スタディレコード」に記録し、担任が一言コメントをつけて返却しています。この記録は、eポートフォリオではなく、あえて紙で行っています。毎日、担任と会話しているような感じで信頼感が高まると考えています。

一方で、行事、面談、定期テスト、

(注2) キャリア・パスポート：児童生徒が、小学校から高等学校までのキャリア教育に関わる諸活動について、キャリア形成を見通したり振り返ったりしながら、自身の変容や成長を自己評価できるよう工夫されたポートフォリオのこと。2020年4月からすべての小・中・高で実施することとされている。
(注3) 上野高校では、生徒に身につけさせたい力として「確かな学力」「企画力」「発想力」「発信力」「協創力」の5つを掲げている。このうち「協創力」は、仲間と協力して新たな価値を創造する力、という意味を込めた造語である。



広島県立
呉三津田高校
主幹教諭
外国語

岡崎友一先生

広島県立呉三津田高等学校 概要

◇所在地：広島県呉市山手1丁目5-1

◇設立年：1907年

◇特色：質実剛健を校訓とし、戦前は江田島の海軍兵学校への進学者も多かった広島屈指の名門校。現在は、2015年に広島県の探究コアハイスクールに指定され、広島創生イノベーションスクールに参加、同年アメリカカリフォルニア州コロナデルマーハイスクールと姉妹校提携し、翌年より毎年3名の短期留学生を派遣している。「総合的な探究の時間」では、GAYAプロジェクトとして、「詩のボクシング(全学年)」「公開ディベート(1・3年)」「社会探究プロジェクト学習(2年)」など多彩な取り組みを行っている。思考力を問う問題などについては「Guideline2019年4・5月号」参照。

◇進路：2019年3月卒業生 186名
合格者の内訳(現役生、延数)：国公立大学112名、私立大学408名、大学校4名、短期大学など7名

模試ごとに、eポートフォリオで事前・事後アンケートを配信し、3年間の活動状況を蓄積しています。事前アンケートでは、各活動の意義を確認し、「前回このような成績だったので、このような工夫をして頑張りたい」といった自分なりの目標を記入します。事後アンケートでは、結果を踏まえて、成績が下がったなど悪化した部分があったら、その要因を分析し改善計画を立てます。単なる振り返りに終わらせず、次の目標設定につなげることが重要です。

こうして蓄積されたポートフォリオは、年4回の面談でも活用されます。振り返ったことを文章にまとめ、さらにそれを面談で話すことで、生徒の自己理解が深まっています。さらに3年生の三者面談では、生徒が担任と保護者の前で、なぜその大学・学部を志望するのか、プレゼンテー

ションをすることもあります。プレゼンテーションをすることで生徒に覚悟と責任感が生まれますし、言葉にしてみると、学びたい内容と希望する進学先がずれていることがわかり、ミスマッチが防げたケースもあります。

西郡 ポートフォリオがそこまで日々の学習の中に組み込まれれば、学習効果の向上にも結びつくと思います。一方で、大学入試のためだけにポートフォリオを導入するという考え方を耳にすることがありますがそれにはあまり意味があるとは思えません。

——佐賀大学では一般入試において、高校時代の主体的な活動実績に対して加点する「特色加点制度」(詳細はp36参照)を設けていますが、どのようなことを目的にしているのですか。

西郡 一般入試はあくまで学力重視です。主体性そのものの評価は難しいと考えています。一般入試で特色加点を導入したのは、高校での活動実績に基づく経験とスキルなどが、大学入学後の学びにどうつなげられるのかを、志願者本人が記載する資料の作成を通して考えてもらうことが目的です。高校で作成したポートフォリオは、活動実績などをまとめ際に活用できると考えていますが、必須ではありません。また、特色加点の申請は任意であり、申請してもしなくても構いません。なお、入学者の状況を見ると、申請した学生の方が、自立性、リーダーシップがあり、入学辞退率が低いという結果が出ており、申請書類を作成するという行為が、学びに向かう態度の一面を反映しているのではないかと思います。本制度は、ボーダーライン付近の受験生を対象に評価するので

が、この学力層における入学後のミスマッチが少しでも減ることが、大学にとっての大きな効果だと考えています。

露木 根拠資料が必要となると、大会などの実績がないと加点されないのではないですか。

西郡 いえ。活動の実績や成果を単に得点化するわけではありません。申請する活動実績を通して身につけた能力や経験が、入学後の学習や活動にどのように活かせるかを求めていますので、その具体性が重要です。ただ、自分には継続性があり、継続的に研究に取り組みますと主張しても文章だけでは伝わりませんので、その根拠資料として、例えば、高校時代に継続的に取り組んだ活動の記録や資料などが材料となりえます。

英語民間資格・検定試験の実施は見直すものの英語4技能の育成には引き続き力を入れる

——2019年11月1日に、2021年度入試における大学入試英語成績提供システムの導入延期が決定しました。この点の影響はありますか。

吉田 2018年度から、実用英語技能検定(以下、英検)を全員受検してきました。全校生徒約700人のうち、600人が準2級、100人が2級に合格。その中から準1級に挑戦し合格する生徒も出てきて、刺激を受けて準1級をめざす生徒が増えており、民間資格・検定試験が、学習意欲の向上に結びつくことがあると実感しています。現2年生も、英検S-CBTを原則全員受検させる予定でしたが、「英検S-CBTを受検」「従来型英検を受検」「TEAPその他を受検」「受検しない」の中から、生徒一人ひとりの

志望大学に合わせて選択できるよう、再検討しているところです。

大内 GTECを年2回、学校実施する予定でしたが、今回の延期に伴って、いったん白紙に戻して他校の状況も見ながら、対応を検討中です。

露木 1・2年生は、年2回、GTECを全員必須受検にしていました。従来型の英検は、希望制にしていますが、全員、卒業までに準2級以上取得を目標にしているので、実質的には必須受検に近い状況です。2020年度は、GTECにこだわる必要がなくなったので、1回受検を検討するとともに、他の民間資格・検定試験を含めて柔軟に対応していくつもりです。

岡崙 1・2年生はGTEC全員受検のままで行くつもりです。また、システムの導入延期によって、英語の指導が大きく変わることはないと考えています。それよりも各大学が、共通テスト英語の「リーディング」と「リスニング」の配点をどのようにするのが気になります。地元の広島大学が1対1していますが、授業中の「聞くこと」の活動が現状のままがいいのか、検討の必要がありますね。

——英語の4技能、とりわけ課題と言われる「書く」「話す」力の育成について、力を入れていることをお聞かせください。

露木 定期考査で記述式の問題が増えており、ALTを交えて採点しています。授業中に生徒を一人ずつ廊下で呼んで、スピーキングテストも実施しています。冬休みは株式会社ISAのエンパワーメントプログラム、夏休みは福島のプリティッシュヒルズのプログラムに希望者が参加し、英語漬けの日々を体験。修学旅行では、ハワイの高校生と交流する機会


を設けています。

岡崙 呉三津田高校も同様です。1年2学期の定期テストあたりから、約80語の英文を記述させる問題を出題しています。2016年度から、1・2年生を対象に、エンパワーメントプログラムも導入しており、日本の大学に在学中の外国人留学生を招いて、5日間、英語漬けの日々を送ります。英語を第二言語とする留学生たちで、発音が聞き取りやすいこともあって、生徒たちは積極的に話しかけており、効果が大きいと感じています。

吉田 ALTと連携したエッセイライティング、ペアワークに力を入れています。国際教育部が、JICAの研修生や、G20参加国の留学生などを招いて、交流を深めるプログラムも企画・実施しています。そうした機会を通して、英語力に自信を持った生徒が、弁論大会や、英語インタラクティブフォーラムなどに参加し、毎年のように入賞者が出ています。

大内 SSHの指定を受けたことから、探究活動の一環として海外の学校との交流がスタートします。2020年度から、台湾の高校と交流を予定しています。参加者は校内で選抜を行いますから、英語によるコミュニケーション力を高める意欲の向上にもつながるはずです。

西郡 佐賀大学では、一般入試で、民間資格・検定試験のスコアに応じて、センター試験の70%、80%、90%の得点に換算する「段階的みなし利用」を採用しています。ただし、センター試験の英語受検は必須です。2019年度、この制度を活用したのは、志願者約5,000人のうち約1,000人でした。注目されるのは、入学直後のTOEIC IPテストでみなし得点で入学した学生の平均点が高いことです。



佐賀大学

西郡 大教授

西郡大教授プロフィール

佐賀大学教授
 / 学長補佐 (学長企画室長・IR室長)
 / アドミッションセンター長
 専門は教育情報学。

もちろん、TOEIC IPテストは4技能評価ではないので単純比較はできませんが、1つの指標となりえます。高校での英語学習において、大学入試のために仕方なく民間試験を受検するのでは本末転倒ですが、4技能習得に向けてさまざまなアセスメントテストを吟味するのは重要なことではないでしょうか。

——**西郡** 最後に、2021年度入試における大学入試英語成績提供システムと共通テストの記述式問題の導入が延期・見送りになりましたが、これまで改革を進めてきた高校の取り組みは変わるのでしょうか。

大内 改革が止まったのではなく、もう一度考え直すことにした、と捉えています。今後も、社会がどのような人材を求めているのかを見つめながら、高校ではどのような教育をしていくのかを考え続けていきます。ただ、これまでは社会や大学を見る一方で、中学生がどのように学んでいるのかなどは、あまり把握していませんでした。今後は中学校との接続も重要になるでしょう。

露木 大学入試改革は、高大接続改革の一部にすぎないはずです。Society5.0に向けて教育改革を進めていくという方向性は変わりません。学習指導要領と、本校の指導計画に基づいて、今後も取り組みを充実させたいと考えています。